

統

一

法財人種
統

一團發行

次 目

遺文に於ける五大要義(完結).....	本多日生
開目 鈔 講 話(承前).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十).....	河合 陟 明
一念三千の眞意.....	本多日生
人格は最後の勝利.....	本 聖 院
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 二 年 八 十 四 第

統 一
明治三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十八年十一月一日發行(毎月一日發行)

第五百七十四號

第四十八年 一月號

明治三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十八年十一月一日發行(毎月一日發行) 第五百七十五號

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髄ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナルテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎メタル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定業ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向フテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髄ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ眞實ハ最も根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髄ヲ發揮シテ國民精神ノ振起ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルル方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルル方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ提出セラルル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

遺文に於ける五大要義 (完結)

本 多 日 生

五、本佛の顯本

續いて本佛の顯本といつて、釋尊の尊さを残らず説き切る所が法華經の有難い所である、それは壽量品に事細かく述べられて居るのであるが、日蓮聖人の御遺文に依つて見ればやはり「開目鈔」の中に、壽量品以外の所には

應身報身の顯本は説かれず

と仰せられた、それは人格の佛と言つて、チャント相もあり優しい考を有つて居る、その佛が始めも無く常住に在します尊き佛であるといふことを信するのである。素人の人は、どんな佛様でもさういふ意味で有難いやうに思つて居るけれども、さうではない、阿彌陀様でもだん／＼研究して行くと、光の相で形は無いと親鸞上人が言つて居る、無碍光如来だとか、南無不可思議光如来だとか言つて、色も無く形も在しませず光の相にておはしますと言つて、サーチャイトみたいものになつてしまつて居る。佛に就いての哲學的の人格實在といふものはなか／＼説けないのである、説けないからサーチャイトへ逃げ込んだのである。基督教などでも神は形無くして在さざる所無しと言ふ、神様は何處にもござるけれども形は無いと言ふ、瓦斯か空気がみたやうなものになつてしまふ。

それでは人間の情意といふものは満足しない、人間の情意はやはり人格を要求するもので、美しい相と優しい考と

いふものを要求する。誰でも自分が好きだとか、有難いといふ人間の情操感激といふものは、対象に人格なくして起るものではない。向ふに心が無いといふものに對しては感激といふものが起りやうがない、心があれば有難いといふことがわかる。或る人が優しい精神を以て傘を貸して呉れたといふことになれば、その貸して呉れた人が有難いといふことになる、傘は事實雨を防ぐのであるけれども、唯だ傘が落ちて居つたといふことになれば何も感謝する精神は起り得ない。併し或る人が雨に濡れて居るのを見て「あなたはエライ美しい着物を着て居るではないか、この傘を貸して上げます、これはモウ返さぬでも宜しい」といふことになれば、五十錢の傘を呉れても、どうもあの人は親切な人だ、顔を見れば怖いやうな顔をして居るけれども優しい人だと言つて、その心といふものを感激することになる。

殊に宗教の燃ゆるが如き信念といふものは、絶對大人格者の尊き慈悲、尊き相といふもの無くして、向ふがサーチライトみたやうなものであるとか、瓦斯體みたいなものであるといふやうなことでは、「有難うございます」といふ感じは起らない。だから佛教に於ては三十二相八十種好と言つて、美盡せる佛といふものをお願ひになつた、婦人の代表者の龍女もその事を言うて居る、

微妙の淨き法身、相を具したまへること三十二、八十種好を以て用つて法身を莊嚴したまへり

と言つて、何とも言へぬ美しい佛様であると讃歎して居る。「あなたは有難いやうであるけれども能く見れば瓦斯みたいなものですか」といふことになれば、その有難さがチト割引されて來る譯である。それは人間を心理學的に、情意といふものを研究したならば直ぐわかる事で、理窟ではさういふものが有難いと思つても、本當の感激精神といふものは起らないことになる。今の法華宗などは信仰が事實上減びて居る、減びて居つてさうして鬼子母神に行つたり、帝釋に行つたりするのは、やはり一種の人格を要求して居る結果である、南無妙法蓮華經ばかりやつて居るとそこに

人格が消えてしまふから、有難いと言つても感應が無い、そこでこれを持歩いて鬼子母神に持つて行くとか帝釋に持つて行くとか、甚しきは狐に持つて行くとか狸に持つて行くとかいふことになる、これは實に悪い事である、私はこれを信仰の類發墮落、癩病系統と言ふのである、腐つてしまつて目も鼻も何もわからぬ。

今壽量品に於て顯本せられた絶對圓滿の無上の佛様は、御相に於ても、御心のはたらきに於ても、何に於ても、宗教の有難いといふ事柄の完全圓滿に達して居るものを探つて吾々は信ずるといふことになる。吾々の方から言へば智意の満足と言つて、智慧の方からも成程さういふ譯かといふことを了解し、情の方からも美しい慕はしい佛であり、意思の方から言つても模範となる、哲學的に宗教的に、道德的に三方面の力が満足する所の佛を説かれた、それが「應身報身の顯本」といふことである。それが爲に日蓮聖人は開目鈔の中に非常に力を入れてこの事をお説きなされた次第である。

さうしてその顯本の一面の眞理としては、澤山に現れて出るけれどもそれは「天の一月萬水に影を宿すが如し」で、根本は一人の佛様である。そこで「持法華問答鈔」に

唯我一人の御苦もやすみ給ふらん

と言はれるので、佛は「唯だ我一人能く救護を爲す」とお説きになつて、澤山に現れて衆生を濟度するけれども、結局に戻せばやはり絶對の本佛一人が汝等を守護つて居るといふ譯である、「唯我一人能爲救護」と佛が仰せられた根本に歸つてその御心勞を感謝しなければならぬ。澤山に現れて御はたらきになるけれども、本に歸せば釋尊一人の御心勞であるといふことを考へて、その分れて御はたらきになる方々に普通の場合有難いとチヨット考へるのは宜いけれども、本に戻せば本佛釋尊に感謝しなければならぬ。そこらの交番で巡查が親切に道を教へて呉れれば有難うと言つても宜いけれども、朝な夕なに感謝するのは我が皇室の聖徳であつて、皇室の稜威あるが故に國家の秩序を維持し、

世界に對して國威を傷けないのである、そこに我等國民の幸福の源があるのである、調査が親切にして呉れるのも聖徳の一部として現れて居るのであるといふ風に考へなければならぬ。調査を有難く思ふことも悪くはないけれども、それがベラ／＼にならぬやうに、皇室の聖徳に纏める觀念が直に働かなければならぬ。法華の信仰はそこが大事であるから「唯我一人の御苦もやすみ給ふらん」といふやうに、本に戻して本佛の有難さに感激の根本を置いて考へなければならぬ譯である。

結局同じお釋迦様と言つても、一切のはたらきをそこに纏めて本に戻すといふ考で祀らないお釋迦様と、そこまで考へて祀るお釋迦様とで、相は同じでも、壽量品の佛となり、壽量品の佛でなくなるといふことを日蓮聖人は言はれるのである。相は同じ釋迦牟尼佛である、往いては一切の佛は皆唯我一人の活現であるけれども、世間ではそこ迄にお釋迦様を考へて有難く思はないから、そこで「未だ壽量品の佛在さず」と日蓮聖人は仰せられて居るのである。今まで澤山お釋迦様は祀つたが壽量品の意味になつて居ない、それは「觀心本尊鈔」に、

正像二千年の間は小乗の釋尊は迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘並に涅槃經法華經の迹門等の釋尊は文殊普賢等を以て脇士と爲す、此等の佛をば正像に造り畫けども未だ壽量品の佛まします、末法に來入して始めて此の佛像出現せしむべき歟

と書かれて、同じお釋迦様であるけれども、壽量品の佛といふことは、前に言ふ天月萬水に影を宿すといふ意味に於て唯我一人の根本の佛様ぢやと了解する時に、壽量品の佛と謂ふことが出て來るのであると仰せられて居る。また「阿彌陀法鈔」といふ御遺文に、

二千二百餘年が間教主釋尊の繪像木像を賢王聖主本尊とす、然れども但小乗、大乘、華嚴、涅槃

觀經、法華經の迹門、普賢經等の佛、眞言大日經等の佛、寶塔品の釋迦多寶等をば書けども、いまだ壽量品の釋尊は山寺精舎にまします

とあつて、澤山お寺があつて釋尊が祀つてあるけれども、壽量品の釋尊としては祀つてゐないと言はれる。その壽量品の釋尊といふことは、今言ふ一切の力用の根本に考へて有難く思ふことナンである、他の語を以て言へば釋尊に對する絶對的の信仰、釋尊の有難い事を絶對的に考へることに於て尊さが出て來るのである。ちやうど日本の皇室の尊嚴といふことも國家的關係から言へば、皇室の尊嚴を絶對的に考へることに於てそこに尊さが現はれて來る譯である。それ故に南無妙法蓮華經を唱へる場合に於ても「本尊鈔」の結文にあるが如くに、

佛大慈悲を起して妙法五字の内に此の珠を裏みて末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ

といふ風に、釋尊の大慈大悲に感激して、それから釋尊の御力に依つてこの簡單なる南無妙法蓮華經の中に一切の功德を籠めてお與へ下されるのである。題目は有難いが、その有難い題目に依つて、吾々に簡單なる信心に依つて廣大なる功德を成就せしめ給ふ力は、大恩教主釋尊より來たるものである、佛大慈悲の致す所なりといふ風に、佛の大慈悲に感激してこの題目の有難い事を心得て行きさへすれば、理窟はわからぬでも、佛様の有難いといふことは情操感激であるから、誰でもわかる。佛の有難い事を除つてお題目の有難い事を研究しようとする、餘程智慧が進んで居らないとわからぬ事でもあるし、又本當にわかればやはり佛様の有難い所に來なければならぬのだから、釋尊の有難い事を考へずに唱へる題目といふものは用を成さない譯である。それ故に「持法華問答鈔」には

暮れゆく空の雲の色、有明方の月の光までも心をもよほす思ひなり

と仰せられて、非常に美しい雲が西の空に縋引いて居れば、あれはお陽様が入るに就いてああいふ彩りが現れて居るのであるけれども、吾々の肉眼には見えないが、本佛釋尊のお在になる相はあれと同じやうに、モット美しい有様で輝いてござるであらう、姑くその象徴として考へる時には、あの美しい雲の輝く後ろに本佛釋尊は在ますのである。或は夜明けの月の光を見ては、その圓かなお月様の親み易き光に觸れて、釋尊の光もこの月のやうに大慈大悲の御光は我が頭の上に光つて居る、月の光は肉眼を以て見ることが出来るけれども、佛の慈悲の光は拜することが出来ぬ、併しこれよりもモット心持の好い光をお與へ下さつて居るものであるといふ風に、吾々の肉眼を以て見得る事を通して、それから聯想作用に依つて本佛の尊さに感激するやうにして行けば宜しい。それにはこの持法華問答鈔の「暮行く空」の聖訓ほど適當な言ひ表し方はないと思ふ。

いづれにしても本佛の人格實在より起つて唯我一人の御力を信じて、さうして釋尊の御慈悲に依つて題目が與へられた、その吾々の感激は暮行く空の雲の色にも釋尊の實在を憶念し、口に南無妙法蓮華經を唱へて、心に釋尊の大慈大悲に感激して行く所に、この本佛顯本の教があるといふことを明瞭に考へて置かなければならぬ。

斯様にして法華經の卓越、法華の妙行、十界五具の妙體、諸法の實相、本佛の顯本といふ五つの事柄を、法華經の五大要義と申して居るのであるが、姑く御遺文の中から適切と思ふ所を引いてお話したので、これに關するところの御教訓は他にも澤山あるのである。この意味合を中心置いて考へるならば、御遺文の到る處みな五大要義の説明に外ならぬので、少し注意して御遺文をこの五大要義に依つて分類して、或は法華卓越篇とか、法華妙行篇とかいふやうにして、五大篇にこれを編纂するとしたならば、大體は皆入つてしまふ。その他に残るものがあるけれども、それは極く軽い意味のものが残るのみであつて、この五つに依つて御遺文の全體が分類され得ると思ふ。さういふ意味で五大要義に關する御遺文の要句を御紹介した次第であります。(完)

開目鈔講話 (承前)

小林一郎

人間の命といふものは永遠のものであつて、前の前の世から積み重ねて來た功德がこの世に現れて佛と成つたのだから、さういふ事を考へれば、この世に於ける二十年や三十年の修行ぐらゐで以て終れりとしてはいけない。後の後の世に於て更に修行をして、更に功德を積んで行けば、後の後の時にはやはり佛と同じに成れるのだ、菩薩の境界に到達することが出来るのだ。斯う言はれて居るのであるから、吾々短氣を起さないでやつて行かないと行けない。この先五十年や六十年で佛に成らうナンといふそんな無茶な事を考へないで、この世に於て佛の教に縁を結んだといふことは有難いことだから、この縁を無にしないで、この世は勿論のこと、後の世までも修行を積んで、結局はお釋迦様が「吾と等しくして異なることなからしめん」と仰しやつたのだから、その佛様と同じになるまでは何度生れ更つても、幾ら命を重ねてもこ

の修行を怠らないやうにしようといふ考はつく譯であります。それだから佛様が今のやうなことを仰しやつたのは、佛様御自身の爲に仰しやつたのではない、吾々に解ける心掛や失望する心掛を起させない爲に、吾々の爲に教訓として斯ういふことを説いて居らつしやる。これは非常に大事な事でもあります。だから永遠の命といふことを信じないで五十年や六十年で萬事を解決しようといふことでは、これは信仰的な生活に遣入れない。現に私などさう思ひます。人間逆も九十歳までも百歳までも生きられないとすれば、これから先生き生て居る間に佛に成れはしない、若し先の先の命を信じないならば馬鹿々々しい。過去の命がこの世に續いて居るといふことを信ずるならば、この世の努力が未來に續くといふことも信じなければならぬ。それで過去を説くのも未來の爲であります。お釋迦様が前の世に於て善い事をしたその報いが今

現れたと仰しやるのは、吾々に對して、吾々が今この世に於てズツと善き信仰をしたならば、後に至つてその報いが来るだらう。斯ういふ確信を興へる爲に説かれたのであります。その所を能く味はつて、これはお釋迦様自身が仰しやつたのではない。本當は吾々に教訓を興へる爲に説いて居らつしやるといふことを深く考へて行かなければならぬ譯であります。

それでお釋迦様は、自分は前の前の世から善根を積んだ、正しい教を世の中に弘めて、正しい教が世の中に廢れないやうに努める爲に随分力を盡して来た、それであるからその報いとして今は金剛身を成就した、永遠の命を保つて大きな力を具へ、大きな智慧を具へるやうになつたのである。迦葉よ、自分は「護持正法の因縁」佛の正しい教を護つて世の中に廢れないやうにすることに力を盡したお蔭で以て、今は「金剛身常住不壞」これから後いついつまでも永い命を保ち、いつまでもこの娑婆世界の人間を皆護つて、皆救へてやる場所はたたらきの出來る佛の境界に到達したのだ。そこでその自分の前の世の行ひを今振り返つて考へて見ると、正しい教を世の中に廢れないやうに護る場合には、時に依ると間違つた主張をして居る者を打破しなければならぬことがある。その時には佛の五戒といふものを受けなくて威儀を修せ

ず、行儀作法はかまはないで、刀や槍や弓といふやうなものを持つて、さうして正しい教を迫害する者を打破るといふことをしなければならぬ場合がある。但しこれは出家の人のことではありませぬ。これは間違つてはいけません。涅槃經を讀んで見るとチヤンと區別してある。出家の人は教を説き教を弘めることだけを主にする、

ば、出家の人は教を説き教を弘めることだけを主にする、ところがその出家の人、即ち坊さんが教を弘めるのを迫害する者があると、吾々のやうな在家の人がこの迫害を打破る爲に戦ふのであります。出家が戦ふといふことは佛教に於ては斷じて許されて居りませぬ。この事は間違ひないことでもあります。だから戦がしたかつたら出家をやめて還俗してやる。それなら戦は悪いことではない。戦ふといふことはこれは在家の人の仕事であります。出家といふものは常に佛に仕へて佛の教を弘めるといふことだけして居れば宜い。それだから出家で以て武器を執るといふことは、如何なる事情があつてもこれは大きな罪であります。それは斷じて許されぬ。出家の人は専ら教を立て、在家の人がその出家の人を保護する爲に、場合に依れば武器を執つて戦ふ、斯ういふ心持があつても宜いのであります。だから武蔵坊辨慶のやうに、頭は坊主であつても薙刀を振廻して居るやうなのはいいけな

い。出家の法に背いて居る。昔の奈良や叡山の山法師といふものは怪しからぬ。戦をしたれば坊主頭を廢すが宜い。還俗してやるが宜い。そこは間違へないやうにしなければならぬ。併ながら心の上では出家の人も亦不正な事を打破るといふその心持はあつて宜い。それは口で教を説くことに依つて人の間違ひを打破れば宜い。時々これは間違ふ。日蓮上人が何でも刀を持つて居らつしやつたといふやうなことを言傳へて居る人があるが、これは彌源太といふ者が御祈禱をして眞ふ爲に刀を身延に寄越した、これは日蓮上人の御書の中にある。これを本にしてそんな傳説が出来た。日蓮上人が始終刀を持つて居た譯ではない、日蓮上人は出家の作法を護つて居るのですから刀を振廻すといふことではない、小松原の法難の時でも、相手が斬つて来た時に日蓮上人は珠數を以て受けただけで、日蓮上人が武器を執つて戦つたといふことは。鎌倉の松葉谷の草庵を焼打された時でも逃げただけでこれを相手にして戦をされるといふことはしなかつたのであります。それをたゞ日蓮上人を景氣の好い人にしてよといふので、日蓮上人は偉い人で、刀を始終持つて居つて、敵が来たなら斬り拂ふくらゐの勇氣があつたといふやうなことを言ふが出鱈目であります。そんなことはある譯はない。涅槃經に書いてあるのでは、在家の人が

場合に依れば武器を執つて出家の人を保護するといふこととでありまして、そこは間違つては困るのであります。

そこで「是の如く種々に法を説くも」これだけに佛の教といふものは非常に尊い、この尊い教が世に廢れる時には、世俗の人は自分の命を捨てても武器を執つて戦ふのだと言つて居るのだから、この大勢の人が命を捨て、護るやうな佛の尊い教を出家の人が軽々しくしてはならない譯であります。人が命懸けで護つて呉れる、命を捨て、護られて居りながら、教を説く富人が懈けて居ては濟まない譯であります。これだけ言ふのにこれでも出家の人が本氣にならないで、佛の正しい教を世の中に弘めて、間違つた者を打破る爲に師子吼する、師子が吼えればまはり中の獸が慄え上るといふくらゐな勢ひを以てやるといふ決心が出来ない。さうして「非法の惡人」佛の正しい教を護らないところの人間を降伏させてこれを破るといふ——武器ではありませぬ、教を説くことに依つて打破ることが出来ないならば、さういふ者は懈け者だ。世間の人が命を捨て、護つて呉れるやうな尊い教を自分が始終説いて居ながら、その説き方に緩みがあるやうなことでは、さういふ坊主は懈け者だ、それは仕方がない、それでは自分を利することも出来なければ、世の中の者を利することも出来ない。だから世間の人は命を捨て、

も武器を執つてまで護る、一方出家の人は、自分の命を捨て、教を説くことに依つてこの教を世に滅びないやうにする、内外共に努力してそこで初めて本當に教が弘まるといふことでなければならぬ。實にこれは條理が立つて居るのであります。

『是の輩は懈怠懶惰なり』さういふ者は要するに懈け者だ、自分の教を弘めるといふ責任を十分に解しないから、さういふ間違ひがある、それで若し佛の教を世に弘める爲に努力が足りないといふならば、縱ひ佛の戒を護つて立派を行ひだけして居つても、それは本當の菩薩の行とは言へない。無論それは戒を護らないより護る方が宜いけれども、たゞ佛の戒を護るだけで、行ひに間違ひがなければそれで宜いといふものではない。斯ういふ事を涅槃經の中に言つてある。この心持で日蓮上人は立つて居る。自分は別に武器を執つて人と争ひはしない、併ながら教を説く上に於ては戦をする人が敵の中に踏込んで行くと同じ心持で、全く自分の利害を捨て、さうして一心に教を弘めて居る。涅槃經の心持を以て自分が世の中に立つて居るのだから、日蓮上人の弟子檀那たる者もこの心持でなければならぬ、斯ういふことを教へられるのであります。これは心の持ち方に就いての根本の決心を言はれて居るのであります。

斯ういふ譯でありまして、日蓮上人の態度といふものは實に明白なものであります。それといふのは自分の考でやつて居るのでなくして、法華經とか涅槃經とか天台傳教といふ人の説に基いて、一切の進退動作をして居られるのでありますから、何處から見られても疊りがない何處から見られても非の打ち所がない行ひをして居られるのでありますから、そこを能く辨へてさうしてその人その人の分に應じて、その人その人の境遇に應じて自分の信仰を勵むと共に、一切の人にこの正しい教を勤めるといふことに努力しなければならぬと思ひます。

(二一頁つゞき)

な方に行つて居ると云ふやうになる。それがお經を讀み、一心に信仰した時には「今の心いづくに行くや」「法華經を渴仰讚歎して居る」「慈悲の心に満ちて居る」「忠君愛國の精神に輝いて居る」といふことが言へるのである。一念三千を學問や理窟で裡ね廻して居る間は駄目である、事實の精神を今言ふやうな高き清き立派な精神に活躍せしむる方法を求むる時、これは坐禪觀法などよりも、本尊を安置して、信念渴仰を捧げる方が宜らしいといふ事になるのである。日蓮聖人の教へられた正しき意味の觀心本尊といふことは、其處から現はれて來るのであります。

本佛實在の宗教哲學(二十)

河合 陟 明

十五、本有體系に於ける境智論の *quid juris* 根據 (承前)

而して以上に述べた如き本有體系における境智の *quid juris* 根據論は、純粹なる先驗論理の領域における超時間的關係として實在と認識を論じたのであるが、しかもかく超時間的なる實在の體験的把握といふ限りに於いて、内はまづ天台の法性實相に對する摩訶止觀といふ關係において、その典型的なる相を見るべく、すなはち法性とは無作のノエマ的境であり、止觀とは無作のノエシスの智であり、この二面の合せんとするところに、いはゆる佛性の性を佛して性が佛たらんとするところの、佛性向覺運動が成立つのである。また外においてはプロチノスの一者の直觀や、スピノザの *scientia intuitiva* 直觀智あるひは一切を *sub specie aeternitatis* 永劫の相の下に見るところの *amor intellectualis Dei* 神の智的愛といふ如き立場が、ひとしく同様の消息を洩らしてゐるのである。しかしかくの如き實在論のシステム中に、今や大いに「時の運行」が加はりきたらねばならぬ、一者とか實體とかいふ如き絶對が時のうちにおいて自己を開展せねばならぬ。ここにおいてプロチノスやスピノザの哲學が、一轉してヘーゲル的な歴史哲學とならざるべからざる所以が存する、いはゆる *statischer Monismus* 靜的一元論より *dynamicischer Monismus* 動的一元論とならねばならぬ所以がある。ベルグソンの創造的進化 *creative evolution* といふのも亦この方向に面するものである。

しかしながら曾ていつた如く、その歴史とはヘーゲルのいふが如き單に人類地上の平面を匍匐するにとどまるものでなく、實に十界常住といふ廣大無邊なる法界社會の法界歴史を論ぜねばならぬものなのであり、したがつてまづそ

もそも根本的に、遠くはプラトンの昔より近くはカントやヘーゲルや現代哲學等が行き極めるところの個體人格の實在性の問題はゆる *Unterblieblichkeit der Seele* 靈魂不滅の問題を、透徹せる叡智の嚴密なる推理のもと、「本有實在の根本自覺」の上に確立し、すなはち一言にしていへば「本有の論理」なる超時間的實在論の上に確立し、さらに換言すれば、佛教の原則たる不生不滅といふ無生法忍としての眞智の上に確立し、而してかかる個體的實在の人格性はゆる不滅の靈魂（この語にも佛教學上問題はあるが、今はしばらくおく）が、十界といふ廣大なる法界社會に、十如因果といふ必然法則を伴ひそれに貫かれそれに律せられつつ、しかも自由意志を以て或は向上し或は墮落し、以て森羅萬象と交渉し展開し躍動するところの、宇宙的規模における法界歴史を大觀せなければならぬのである。天台・妙樂は夙にこの廣大悠久の境を指示して、これを縁して、即ちこれを對象として、觀不思議境・發菩提心すべきことを止觀に説き、以て若己若他、並緣三無始經歴之境と道破してゐるのである。

また既に屢々述べた如く、古代・中世・近世を通じて、プロチノスもスピノザもカントもヘーゲルも、一個最高統一なる無制約者の理念を立てつゝ、しかもその中において絕對の根柢と絕對者そのもの・神の根柢と神そのもの即ち *Gottheit und Gott selbst* とを混同してゐる、これは實に西洋思想史を一貫する元品の無明である、ゆるに神はつねに獨斷に坐して「非眞理」の烙印を免れず、没落の運命を免れない。否實に佛教内部に於てもこれは長く混沌として混濁せられきたり、否今なほ、未解決の難問として抛擲せられてゐるのである、すなはち法身理常と報應顯本との明確なる論理的分界および究極統一が今だに示されないのである。思へばこれ實に東西古今を貫いて人類思想史の全體を覆ふ根本無明といふべきである。島地大等氏が本覺思想論のうちに、つねに天台と華嚴と眞言の三大乘家をあげて、學問的佛教とし、諸一乘教家の見本とし、とくに本覺佛教の代表とせるも、如何せんこれらが悉く根本的に、しかも各々その長所と誇る所において、まことに深き實在論上の致命傷を有するものなるを！ 詳細はしだいに後述しよう。

かくて佛教たる否とを問はず、西洋哲學たる否とを問はず、由來古今の思想史を通じて、その一部ないし全部が、或は全く喪はれ、或は全く混濁せられ、はた又單に要請たるにとどまりしところの、(一)、萬有現象の本體的絕對たる宇宙の根本的實在性とその普遍的必然の法則すなはち十界互具なる眞如法性とその十界を一貫する十如因果と、(二)、さりながら萬有最深の本有普通の要求たる、したがつて宇宙生命たる眞如の根本動向に基礎づけられつつ、個

として現るる一人格の一念の無作本來の自由意志による佛性向覺・佛性行善といふ當爲實踐・目的追求・理念實現としての向價値的無限の向上努力と、(三)、この大向上を既に完成し、しかも無始に完成して無上の大覺を成就せる宇宙的偉人格、すなはち眞の絕對者たる本佛が、一面においては法佛一如なるがゆゑに *Geistesober* 律法者たると共に、他面においては大悲の意志を以てその法性限定の自在無碍なる活動をなす *Halteober* 恩賜賦與者としての絕對の協力と、すなはち無限の感應救済との、この三層の關係の如き、すなはち予のいはゆる「法界三律」といふ如き、微妙深遠なる宇宙構造・絕對者の構造・人間構造は、また未だ眞に充分に明かにせられてゐない。その *Gongyan Knuth* の *anbahnende* 決定投票は唯だ一の本佛實在に存する。

ここにおいてか一たび本佛實在の眞の構造と論理が顯れたならば、ここに人類の思想史は、然りまづ逸早く佛教辭書と哲學辭書とが根本的に書き改められねばならぬ、その佛陀に關する項・神に關する項・絕對者に關する論・眞實在に關する説が、根本的に更改されるか、訂正されるか、添加されるかせなければならぬ、眞に絕對實在に關する完全説として一大修補が加へられねばならぬ。從來の諸説は悉く何等かの不完全性ないし誤謬を蔽し、たとひ一見遺憾なく説明せるが如き思想も、一たび峻々たる眼識を以て看破するとき、つひに最後の一點において「非眞理」の一獨斷に陥つてゐるのである、諸説比々として然らざるはない。現代の西田哲學・波多野宗教哲學ないし日蓮門下の所謂學者の諸説すら亦殆ど然り。これ實に予が多年研尋攻學の結果、感慨を深うせるところのものである。

カントは從來の哲學史に對し、とくにロツクやヒューム等の心理學的傾向に墮せる不純なる認識哲學に對し、嚴密なる先驗論理に *und jense* 權利根柢を有する認識論を組織し、以て「未だ人間が発見せざりし哲學」を樹立したといはるのであるが、しかし彼れの思想たるやすこぶる理性の權威を承認したるもの如くでありながら、しかもなほ眞の純粹理性の嚴密なる推論を遂行せず、理性の充分なる權威を承認したるもの如くでありながら、しかもなほ *Vernunft* 理性の自己信頼に發するといふその理性の自己信頼を完遂せず、畢竟するに直觀的洞察は不徹底たり思辨的論理は不透明にして分裂的實在論に墮し、いはゆる別教隔歴の見解に終始したるものである。それは彼れ自らのいへる意味においてよりも、寧ろ彼を *Kritik* 批評するが如き意味において、眞に *Kristis der Vernunft* 理性の危機・理性の難破を示したるものであり、而してここに物自體より神に至る一聯の大いなる論理の溝渠 *Knuth do*

Logic を留むるに至つたのである。この點においては佛陀大覺の源流を拘める天台智者の方が、遙かに深き圓融四頓なる圓教無作の思惟と實踐とを、優に示してゐるのである。否そもそも佛敎は實在の推理あるひは理性の推論においても亦實に人智の上に絶好典型を示す、即ちその徹底せる透明性と深遠性と圓熟性とを示す、これを一言にして「本有の自覺」といふ。もしそれカント哲學を否定的方向より忌憚なく批評すれば、あだかも佛敎における種大乗の唯識學の如く *monistic*、寄木細工的である。しかし彼れの人格と思想は謙虚にして眞摯であり、その學的良心の純潔とその思想的影響の大なることに至つてはあだかもまさに天台と相似たり。しかも一方においてカントがとくに絶對の問題について終始暗中模索し、*Ding an sich* 物自體といひ *Noumenon* 睿智的本體といひ *Godheit oder Gott* 神性あるひは神といひ、諸所に流浪し化境に彷徨しながら、つひに實踐理性の優位を叫び、知識の權利を解除してもなほ信仰に地歩を譲りしところの態度と、他方において天台が發達顯本三如來、永異諸經と高唱しながら、しかもなほ有始・有限の致命傷を醫し得ず、つひに進んで、或は退いてといふべきか、佛陀の人格性よりもむしろその根柢たる法性至上・眞如第一義諦論に歸結したるの思想とは、あまつさへ東西地をかへ古今時を隔てて一は外界自然の學的根據と他は唯心内界の實踐的認識とに、この意味深長なる好箇の對照を見る、實に深甚の感なきを得ない。これ眞に人類思想の典型的なる *Problematik* 問題提起といひ得るであらう。これらの詳細もまた今は割愛し、後に譲らざるを得ない。

由來、佛敎を解するには一たび天台を學ぶべく、西洋哲學を解するには一たびカントを學ぶべし。しかも天台實相論の基礎的半面を發展せしめし支那趙宋の迷門天台は、ただ實在根柢論にとどまつて、未だ建設面に進まず。これに反し天台佛陀論の致命傷を醫さんとせし日本中古の本門天台は、諸派並び起ちしも難問容易に解けず、やがて眞如佛性と絶對本佛との混沌たる雜亂に陥り、つひに異端傍系の本覺思想に墮するに至つた。さらにこれに對し、カント以後の諸家は、曾て一たびフイヒテよりヘーゲルに至る *Geistesentwicklung* 精神の形而上學の組織者によつて、大膽に絶對の問題を突破し得たりと考へられたが、やがてその依然たる不備と獨斷とが曝露するに及んで後は、現代に至るまで殆んど彼れの *Epigonen* 亞流たるを免れず、彼れの掟てし領域を神聖犯すべからずとなせるもの如し。

しかしながら *Kant verfahren heisst Kant überhohn* カントを解するにはカントを超えゆかねばならぬといはるる如く、否その語の眞意味を實に遂行すべきが如く、また同じく天台を解するには天台を超え、然り佛敎を解するに

は正に佛智に迫らざるべからず、ひるがへつて「本佛實在の敎學」たる果して如何。それはカントが自己の認識論を目して「史上未だ何人も考へざりしところの哲學」といふが如きものとは異り、否一面においては確かに同様にかくいひ得るものではあるが、それよりもむしろ實に、「古來、何人も求めながらしかも未だ求め得ざりしところのものを満足せしむるところの哲學」といふべきであらう。それは實に、人間は本來形而上的要求 *metaphysisches Bedürfnis* を有すといはるる如き、その形而上的要求を完遂せしむるところの哲學、すなはち眞の形而上學であり、しかもそれは全く眞の宗教そのものに他ならないのである。かのカントが否認せし從來の一切の古き形而上學、はたまた彼れが新たに掟てし一定の限界内における新形而上學、これらの新舊古今の形而上學もさりながら畢竟するに未だ元品の無明を破らず、根本無明を脱せず。しかも形而上的要求こそ人類古今の思想史を貫く根本要求であり、かつこの形而上的要求はたまた眞の哲學的要求とは、いはゆる超時間的・無限的全體を對象とするものなりといひながら、しかも彼らは未だつひに、根柢實在たる無作の眞如と完成實在たる無始の本佛と、あるひは即ち、根本實在たる法身常住の法格と完全實在たる報應顯本の佛格と、または即ち、予自身の意味においてカントを開顯的に隨義轉用するところの *quid juris* 的實在と純價值的なる *quid facti* 的實在との、かくの如きすなはち、一面においては哲學の根本原理そのものと、而してさらに他面にはその哲學の典義書においてつひに宗教的意義を帯びきたりその宗教的神殿の内陣に内薄するところのものとの、一言にしていへば即ち、未だ非人格的理法にとどまつてしかもいはゆる第一原理といはるるところのもの、眞の完全なる人格實在そのものとの、この古來最も難問題たる二者の區別を、未だつひに發見してゐない、否一言にいへばむしろただ後者すなはち本佛の實在が、未だつひに發見せられざるがために他ならぬ。況んや前者より後者に達すべき思惟必然の幾層の發展過程の論理においてをや。ここには實に幾層の思想の大躍進を要するのである。このゆゑに「何人も求めつつしかも未だ求めざるころのものを與ふる哲學」こそ本佛の哲學であり、本佛の形而上學であり、本佛の宗教であらねばならぬ。ここにはあだかもまさに「イイチエがツアラウストラの巻頭において *Man buch für Alle und Keinen* 「何人のためにもありながらしかも何人のためにも非る書」といひし言葉が、全く新たな意味において妥當する、然り開顯的に妥當する、「見よ、ここに眞の超人の姿あり！」それは確かにカントの認識論におけるが如く「何人も未だ發見せざりし哲學」といふべきものでありながらしかもむしろ「何人

も齊しく求めたりし哲學」を眞に充足し完遂せしむるところの教學である。カント哲學そのものすら今一步百尺竿頭さらに大いなるコペルニクスの轉回を今一度びなしとけて、據つて以て救はるべき眞の「實在の哲學」であるのである。眞の「神の學」であるのである。哲學本來の意義と使命たる Vollendung 完全終結を對象とするところの眞の Vollendliche Totalität 終極理想的完結體系としての學は、ここに始めてその全貌を現し、而してその學はすでにもはや教として、いはゆる教學としてさらに宗教として、ここに始めて我々の人智はその全き構成を告ぐると共にさらに無限なる神祕の世界に入りゆくに至るのである。

而して以上はこの本佛實在の *quint jura* 根據たる境智の關係を、まづその先驗界における超時間的關係において一瞥した。これに對する時間的展開の相は、すでに本論の最初より節を逐うて略述したるところであるから、今はたゞちに建設的實在たる本佛の構成に入らんとするに當り、まづその佛果における時間規定、否むしる時間の鎖鎖・時間の桎梏の超説の論・時間そのものを究盡するの意義、いはゆる唯佛與佛、乃能究三盡、諸法實相なるものにおける時間論よりして考察を始めねばならぬ。

舊臘十二日 天皇陛下 神宮御參拜の日 帝都の一角 佛舍利奉安の御寶前に 立正安國の大誓願を言上したる後、本佛實在の大法が人類の將來新たなる黎明の光たることを豫言しつつ 之を記し、越えて本年一月九日 中華民國の對米英宣戰布告を聞き、眞に世界史上民族解放の曉なるを思ひ、感慨無量のうちに之を校正す。
南無妙法蓮華經 (つゞく)

一念三千の眞意

本多 日生

日蓮主義の人は能く「一念三千」といふことを云ふのであるから、極く簡單にお話をして置かうと思ふ。一念三千といふことは非常に難かしいことであるとか、それが何よりもエライといふやうな風に能くいふ。それは一念三千といふ事は有難いことではあるけれども、信仰といふことを以て極致とするに於ては、そんな解釋は一番エライことではないのである。日本の道徳でも忠節といふものが大切だとすれば、忠節の講義よりも忠節の熱誠を以てそれを實現して居る方が尊いのである。忠とはどんなものか、孝とはどんなものか云ふやうな講義は、一番エライものではない。一念三千を講義して「之を俺は知つて居るぞ、お前達知るまいが」といふやうな事を言つて一番エライやうに思ふのは、忠義の講義だけして威張つて居るやうなもので、それは講義的一念三千といふか、口眞似一念三千といふか、大したものではないと私は思ふ。モットそれがこなれて實際に活躍しなけ

れば、日蓮聖人の紹介された一念三千ではないと思ふ。併し乍らまるきり組立てを知らぬといふと、矢張りいけないから、一と通り極く平易に組立てを申上げて置きませう。

大體「一念三千」といふ事は、どういふ事かと言ふと「一念」といふのは吾々の心の働き「一と思ひ」といふことである。寒いとか暑いとか、嬉しいとか悲しいとかいふことが「一念」である。「三千」といふのは宇宙に現はれて居る總ての萬有を指すのである、その「一念」の中に萬有が具はつて居るといふこと、一心法界を包むといふことを「一念三千」といふのである。であるから心的宇宙觀であります。心を基にして宇宙を説明したる思想である。併し唯心論とは違ふ、その心の中に物もあり一切があるのである。西洋の哲學に於ても今や内省的一元論といつて居るのが即ちそれである。その一念に三千を具へるといふ「一念」といふ方は、辛いとか嬉しい

といふことであるから解り易いが「三千」といふ數に就て一寸エライ事のやうに思ふ者が多い、三千もあるといふと大變だと思ふけれども、何も面倒なことはありはせぬ。之を解り易くお話しするならば、妙樂大師が、

事理

因果

身土

といつて居る、これは能くわかる言葉である。事理の「事」といふのは表に現はれて居ることをいふのである。それは何を指すかといふと「事の十界」といふて地獄より佛様まで現はれて居るものを指すのであつて、人間なら人間として現はれて居る、畜生なら畜生として現はれて居る、之を「事の十界」といふ。詳しくいへば、

地獄、餓鬼、畜生、傍羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛

これが十界である。この十界も二つに別ければ「迷悟の關係」といふことになる。即ち前の九は迷ひの方に屬する、佛は悟りに屬する。迷へる者と悟れる者で、その迷ひの階級が地獄から菩薩まで九に分れて居る、即ち「迷悟の關係」である。而してその迷へる者と、悟れる者が根本から違つて居るものではないといふのである。それは根本は同じものであるけれども、緣に依つて迷つて居

ると迷はぬ者とがある、丁度國から出て来る時は、どつちも同じ願良な書生であつた、所が一方は善き友達があるが故に益々勉強して、學校から歸つても始終善い話をするといふ方に行つた。所が一方は悪い友達が出来たものであるから、學校から歸つてもカツプエーに行くとか、終には學校に行かず一杯のみに行くといふやうになつて、遂には掻拂ひになつて監獄に送られたといふやうな譯になる。その悪く行く方と、良く行くといふことの關係である。けれども本は同じ初心な書生であつた。そこで縁を選ばなければならぬといふことが、一念三千の法門に於て一番大事なことである。既現窟は實はどうでもよい。實際の問題は、本は同じものでも事實上現はれて行く所に非常な違ひが起る、一步千里の差といふことがあるが、一念に萬里の相違があるといふことが一念三千論である。グチャ／＼いふことではない、之を考へると身の毛が慄つと天台大師は言つて居る。唯だ口でいへば一念三千であるが、その「ハツ」と思ふ今の一念何處に行くかと考へた其の時、詰らない考を持つて「一つ彼奴を撲つてやらうか」と思へば、それは傍羅である。「何か誤魔化してやらうか」と思へば泥棒であり、餓鬼であるといふやうに、その時に「ハツ」と現はれる刹那の一念が、即ち吾々が前途に向つて行く勝敗の岐れる所

である。そこで今の心いづくに行くかと觀察せよといふのが、一念三千論となつて来るのである。それを捏ね廻はし過ぎるから分らなくなつてしまふ。ソナナ面倒なものではない、さういふ風に「事」には十界の差別がある。それから理といふのは、内輪に潜んで居るもので、その内輪には悉く佛性を持つて居る、そこに平等があるといふことである。即ち「事理」といふことは、現はれとしては時に地獄あり、餓鬼があるけれども、その内面には地獄の中にも餓鬼の中にも佛性がある、道樂息子の心の中にも矢張り大和魂もあれば、人間の善良なる性能もある、之を一轉せしむれば道樂息子も改心して勉強するやうになるといふやうな事が「事理」といふことである。それからこの問題が進んで行つて因果といふ關係になつて行くのである。それは約して因果といふけれども、詳しくいへば之を「十如」といつて居る。「十如」といふのは、

如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。

これが「十如」である。「十如」のお話をすると長くなるが、之を簡單に略していふと、「因、緣、果」といふ事に這入るのである。

物には原因がある、その原因の本を辿ると此處に作用

といふものがあるから原因になる。即ち卑近な例を以ていへば、ここに犯罪をした、泥棒なら泥棒をして監獄に送られたといふ結果を見たのは、餘所の家に這入つて筆筒から着物を盗んで来たといふ作用がある譯である。さうすると泥棒には泥棒の力といふものがある、力がなければ物を盗めない、戸を打ち明けたら、筆筒を明けたらする力がなければならぬ、或は鍵を乗越して行くとか、家の者が眼を覺ましたらドヤシつけてやらうといふやうな力といふものがある、力といふものには體がなければならぬ、そこでその體にはさういふ氣性がある、氣性の上には相がある。例へば泥棒には泥棒眼といふやうな險しい眼がある、それだけが一つものになつて原因に現はれて来る。この「相、性、體、力、作」を因といふ字で納めれば、これが一つの原因である。佛教でいふ「因果」といふのは「因、緣、果」の「緣」といふことを略してあるが、その因を詳しくいへば、因といふものには先づ作がある、しわざには力がある、力には體がある、體には性がある、性には相があるといふやうになつて来る。次に「緣」といふのはどういふ事かと云ふと、即ち泥棒をして来たものであるから、今迄穢い着物を着て居つた奴が、急に綺麗な着物を着たり、今迄貧乏で仕方がなかつた奴がビールを飲んで調子を上げて居るといふやうな事

になる。そこで刑事の限に留つて「責様どうしてさういふ綺麗な着物を着て居るか」「ヘー」といふ譯で取つ捕つて段々調べられて、これは泥棒に違ひないといふことになつて、懲役に行かんならぬといふ判決を受ける。其處で刑務所に送られて淺黄の着物を着て働いて居る、それが結果であり報である。さうするとそれが「本末究竟等」といつて本に泥棒のやうな面付をして居つて、泥棒根性があつてやつたといふことが「本」である、その「本」と終ひに淺黄の着物を着て働いて居るといふ「末」と違はないといふのが「本末究竟等」といふことである。泥棒根性の奴が非常にエライ者になつて、人から尊敬を受けることはないといふことである。正直に勉強した者はエライ者になる、遊んだ奴は、終ひは不良少年になつてしまふといふやうな譯のものである。所がこの「因果の關係」といふものが、十界の今いふ迷ひの方にも悟りの方にもすべてある。殊にその「因果關係」の中の重いものは「縁」であると説くのが佛教である。縁を慎しめといふ事である。世間でも能くいふでせう、縁といふことは誰でも知つて居る「縁はいなもの」味なものといつて、ヒョツとしたことで思はぬ事に引かかる。どうもそこは不思議なことで、己れの果報の致す所である。悪い友達が出来て悪い人間になるのも矢張りさういふ縁が、

間は豚や犬とは違ふ。一俺は詰らぬ者だ、乞食して居つて寝るには布団が無い」といつても、矢張りそれは人間である。豚のやうな生活をして居つても、やはり人間といふ範圍である、その同一果報のある者が人間の世界に生れて居る。さういふ風に身があり、仲間があり、その住み所がある。蚯蚓は塵溜に住み、鶯は梅の木の上に、とまるといふやうに、各々住み所が違ふ。雪隠蟲は雪隠に任んで居るが、綺麗な庭に出しても亦以前の住家に急いで歸る、果報の致す所仕方がないので、自分では矢張り雪隠が宜いと思ふて居る。斯ういふ所から考へて來ると、中々恐ろしい事であるので、誰が引張つて行くのでもない、己れの果報に依るのである。鼠なら鼠を座敷に引出せば、決して絹布團の上には坐らない、矢張り蜘蛛の巣のある穴の方にビヨンと這入つて行く。さういふ風に一切の者は果報相應の世界を求めて行くといふことがあるのである。そこで地獄の果報を持つた者は、一方に清い淨土があつても、そこには行かない、火の燃えて居る釜の中に飛び込むべき運命に行く、洵に情けない事であるけれども、さういふ風になるのである。そのことを妙樂大師が前に「身土」といつたのである。さうしてこれが五陰世間（その物の身）、衆生世間（仲間）、國土世間（住所）といふ三つに分れて居るから、之を三世間

その人につき纏ふて居るのである。さうすると段々悪くなつて行く、その縁といふものは一つ悪い方に向ひ出すといふと、段々悪い縁が重つて來る、惡は益々惡、愚は益々愚、善は益々善、賢は益々賢といふものになる、それは恐ろしいものである。故に足を洗はんければいかぬ、「毒を喰はば皿まで」といふやうなことになるらうものならば、逆も浮ぶ瀬がないのであつて、佛教は何時でも「翻然として振り返れ」といふのである。何時でも振り返れ、仲間と一緒に泥棒に行つて盗んで來た物を一緒に擔いで歸り居る途中でも、改心してそんな物は捨ててしまつて、仲間と喧嘩してでも逃げて來いといふのが佛教である、そこが面白い所である。その事柄が十界の總てに附いて居ると説いた、それが「十如」といふ事である。所がかういふ關係に依つて身が出来て居る、人間なら人間といふ十界の身が出来て居る。さうすると人間の住んで居る世界といふものがある、さうしてこの人間には仲間がある、一人ではない大勢の仲間がある。人間とか餓鬼とかいふと一人々々のやうに見えるけれども、人間世界、餓鬼世界といふ仲間があつて、澤山うぢや／＼して居る。けれどもそれは皆因果關係で、同じ人間に出て來る者は人間の果報があるのである。その中でも果報が多いとか少いとか云ふけれども、どんな薄命な者でも人

といふ。三世間といふのは、三つに差別せられて居るといふことである。即ち人間とか畜生とか、けじけじとか蚯蚓とか分れて居る、それが五陰世間である。その仲間がある、それが衆生世間である。さうして各々その住家がある、それが國土世間といふことである。これで三世間になる。而して前に申した十界といふものは五ひに十界を具して居る、十界五具といつて、十界が各々十界を互具するから玆に百界といふものになる、一りの人間が地獄から佛様までの十の性質を具して居る、畜生もやはりその十の性質を具へて居る、皆各々十界の性質を具するが故にこれが百界になる。その百界に各々因果の關係が就て居る、即ち十如を有つて居るが故に、これが千如といふことになつて來る。さうして此の千如に三種の世界を加へるから三千世間となつて來る。斯の如き三千世間が、始めの一念に具へられて居るといふのが即ち一念三千である。詳しくいへば一念具三千である。その今の一念は、此の中のどれであるか、雪隠蟲か、餓鬼か、地獄か、菩薩かといふ問題が一念三千觀といふ事である。今の一念いづくに行くやと觀察せよといふのである。

勤修もしない、本尊も祭らない、お題目も唱へないといふやうな者は「今の心いづくに行くや」といへば、地獄に行つて居るか、或は美味いもの食ひたいといふやう

人格は最後の勝利

本 聖 院

世間で、物が足らぬと思ふは工夫が足りないのだといふ言葉が聞かぬが、さて如何に工夫するかといふ時に頭腦を働かさねばならぬ、元來無から有は生じない道理だから、何事にも臨機應變の活用が出来るやうに平素から訓練が積み重ねられて居らねばなるまい、此の精神訓練に何を以てするかといふことが最も要點であらう。

田舎者が上野驛に下車したが、自分の行くべき方向が解らない、そこで上野の山に昇つて地圖と對照した時に、一目瞭然迷はずに目的地に行着けるやうに、高い所から平地を瞰下した時にすべてが會得出来る。同様に私共が世間を知るには一度出世間に超出した時、能く世間が理解出来るものなのである、ここにみ佛の化導方法が蓮華のやうにといふことを有難く思ふ。博士が大將だといつても敢て三明、六通の聖者とは云へない、矢張り洗つて見れば元品の無明から出發して居るのであるから、一寸先は闇である、どうして三年も五年もの先が知悉されよう。人格を完成しようと思へば、敬虔な態度を以て、手を膝にして本師釋尊の高説を仰ぐべきである。經に曰く「法は常に無性なり、佛種は縁によつて起ると知ろしめす、是故に一乘を説きたまふ」又曰く、「如來の説法は一相一味なり、所謂解脫相、離相、滅相なり。究竟して一切種智に至る」と又曰く、「我はこれ法王、法に於て自在なり、衆生を安穩ならしめんが故に世に現す、汝舍利弗、我が此の法印は、世間を利益せんと欲するをもつての故に説く」と。佛敎は度世の要道を懇説されたものであり、従つて一切世間の善論は皆佛説に統一せらるるものな正法こそ吾等の人格を完成せしめ、最後の榮冠を戴く唯一の直道だといふことを強調する。

記 事

本 部 報 告

慶旦會 昭和十八年癸未年こそ我が開國已來未曾有の元朝であつた、即ち南は濠洲から西は印度洋から遙かに大西洋にも出で、東北はアフリカ・ニューシヤン諸島に皇威赫々と照り渡つた輝かしい年頭であると共に、幾多の尊い英魂を追憶して自ら襟を正し合掌する。

戰爭と疾病には至も正月もない、殊に本年は決戦態勢で、市中も極めて靜肅に春を迎へたことを嬉しく思ふ。口で教へても理解出来ない者には、事實を以て示すことである、これを因縁説といはれる。兎に角戦時らしい慶旦に當り、本部御堂前もこれにふさわしい莊嚴を以て麗しい日出時、團員有志並に酒悅立正産親會員等、悉しく法味を捧げ、次に國民儀禮に移り終つて磯部理事、池田新一氏及び朝日一郎氏等の講話あつて九時半頃閉會。

團員會 例年七日の本團新年團員會も、本年は木曜日に相當するので、時間には十日の日曜午後二時に開催された。和賀山口の兩師並に上田理事長始め幹部の諸氏、團員諸友等によつて莊重森嚴な式典が営まれた。今年には來賓各位も、或は先約あつたり、知友の不幸等で殆んど文書の臨席に過ぎなかつたが、磯部理事の挨拶に續いて、上田理事長の所感、和賀僧形並に河合講師の述懐に時の過ぐるの早きを惜しみつつ、薄暮支離三唱してお別れした。發同志中村清一氏の北滿より團員宛の新年の辭は、磯部氏代讀して強烈な信念を喚起され、法悅の實況を滿堂せしめられた。

実行會 本部に於ける恒例の立正改修會も、今年こそは一同前線に在るの感で以て彌々眞剣に征戰完遂と皇威宣揚を祈願し、又陣病攻諸靈の冥福を祈るべく、一月六日より二月四日迄の三十日間、毎朝曉開を期して大衆一結、十方の佛前へも微そよとばかり聲をかぎり法華三十講を營んだ。その邊きは浦和及び浦和在の辻村より、或は幡ヶ谷、下高井戸、或は萩窪等、或は長崎町より四時超して一里半を徒歩にて駆けつける勇士もあつて涙ぐまき次第、信の力大なるを思ふ。

日蓮聖人言はく七難即滅、七福即生と祈らんにも此の御經第一の難の御祈禱にも此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり」とも又「經の第五に云く、諸天晝夜常爲法故而護之云々、又云く、天諸童子以信給使刀杖不加毒不能害云々。諸天とは、梵天・帝釋・日月・四大天王等なり、法とは法華經なり、童子とは七曜・二十八宿・摩利支天等なり、臨兵闘者皆陳列在前、是れ又刀杖不加の四字なり、此等は隨分の相傳なり、能々案じ給ふべし」等々。法華一佛乘の偉力、神祕、尊嚴を人々は慎重に味識すべきである。

當年は厚生省が普頭取りとなつて「健民運動耐寒心身鍛練」を廿一日大衆入りから十五日間、全國的に展開して、武道、體操徒歩等の訓練と早起普及を圖らるるの結構に思ふ、明年は更に進んで身も心も打揃つて立派な名實共に神の子たるにふさわしく努力して戴きたいものである。先師の言に「禮樂前に嚴せて眞道後に啓く」と爲法國有難い事に思ふ。

土曜講座 小林先生の聲氣雄辯が、毎週土曜日午後二時より開かれて、勝聖夫人の篤款すべき懇解を以て、聖敎を讀美し、護持正法を誓ふ純情は、能く夫の友稱王をも引導するに到るを

題聞して、私共の無念悔愧に堪えない次第である。特に今の時、國民の精神を復興し、日常に備ふるには、何としても完備した教を興ふるの急なるを思ふて、誰か此の第二第三の勝鬘夫人の出現を期すを得んやである。

佛天の冥護によつて第一と第三の土曜に講堂より引續いて營まるる、はちす婦人會は、其の因縁深重であるから、既に「内に苦難の行を説し、外に是れ聲聞なりと現す」る方々の必ずあることを信じて悦びに堪えない。益々お互ひ策勵し合ひつつ勳加精進致さうではありませんか。

福島 教信

高南例會 一月十六日土曜日の午後三時より例會を實務科教室に開いて、橋本講師に依る日蓮聖人の正傳、御降誕から開宗迄を聴聞して、深く反省せしめらるる處あり、次回を待ち遠しく思ふ。傳聖の言行は、直ちに我等若人の好範として實踐致したいものである。但其枝葉末節に捉はるるのを警戒せねばならぬ。

團費誌料維持費及寄附金領收 (自十二月二十二日)

一金四圓四拾錢也	神奈川	石川利恵子殿
一金貳拾錢也	同	佐藤嘉平殿
一金貳圓四拾錢也	東京	笹野隆吉殿
一金壹百五拾圓也	同	大下正人殿
一金五拾圓也	同	東京府教化團體聯合會殿
一金貳圓貳拾錢也	同	平井慈祥殿
一金拾圓也	同	高橋辰二殿

一金貳圓五拾錢也	東京	萬壽宮殿
一金貳圓四拾錢也	同	安藤政治殿
一金參圓也	同	佐藤吉郎殿
一金貳圓五拾錢也	同	增井廣吉殿
一金貳圓五拾錢也	同	佐藤秀三殿
一金貳圓五拾錢也	同	阿部武弘殿
一金貳圓四也	同	上田秀三殿
一金壹圓八拾錢也	同	柴田武久殿
一金貳圓貳拾錢也	同	大田保久殿
一金四圓四拾錢也	同	秋山照久殿
一金貳圓貳拾錢也	同	有田圭宏殿
一金貳圓五拾錢也	同	高田圭宏殿
一金參圓也	同	伊藤乙彦殿
金拾圓也	同	中尾元三殿
金百〇八圓也	同	酒立正青年團殿
一金貳圓五拾錢也	同	大坂隆太郎殿
一金四圓四拾錢也	同	同
一金貳圓貳拾錢也	同	同
一金貳圓五拾錢也	同	同
一金貳圓五拾錢也	同	同
一金拾貳圓也	同	同
金五圓也	同	同
金五圓也	同	同
金壹圓貳拾錢也	同	同

一金貳圓五拾錢也	千葉縣	長澤知教殿
一金貳圓五拾錢也	鹿兒島	松本宮子殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	宮入正雄殿
金五圓也	千葉縣	花島喜三郎殿
金拾圓也	東京	内海額二殿
金參圓也	盛岡	細谷宗司殿
金五圓也	長野縣	小山忠五郎殿
金拾圓也	東京	小西隆正殿
金五圓也	同	御野美喜子殿
金貳圓五拾錢也	同	白須美智枝殿
金貳圓貳拾錢也	同	村田竹次郎殿
金五圓也	同	鈴木二光殿
金貳圓貳拾錢也	中津	有田日達殿

財團法人統一團會計

右雜有入帳仕候也 (以是領收證代用)

統一團 金貳拾錢 送料壹錢

價定一統 半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共 一ヶ年 金貳圓貳拾錢

注 ○前申込ハ總テ前金ノ事 ○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可 ○郵購場ノ場合ハ必ず新製共ニ例通

昭和十八年一月二十七日印刷納本
昭和十八年二月一日發行
(第五百七十五號)

發行所 財團統一團
法部 印刷部 事務部
東京市小石川區音羽町六ノ十七
東京市西谷區内藤町一
印人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團統一團
法部 印刷部 事務部
東京市小石川區音羽町六ノ十七
東京市西谷區内藤町一
印人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

配給元 日本出版配給株式會社



統

一

法財人團

統

一

團發行

目 次

法悦と願行(其一).....	本多日生
優婆塞戒經要解(其八).....	本多日生
開目鈔講話(第四十七講).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十一).....	河合陟明
記事	
○本部圖報	
○福島教信	
○入帳報告	

第四十八年三月號

第三卷第百七十六號
 昭和十八年三月二十五日發行
 昭和十八年三月一日發行

統

一

第三卷第百七十五號
 昭和十八年二月二十七日發行
 昭和十八年二月一日發行

第五百七十五號

第四十八年二月號